

地域特産種増殖技術開発事業（亜熱帯磯根グループ：タカセガイ）

基礎調査・資源添加技術開発（要約）

久保 弘文

・基礎調査

生態調査等は前年度に終了し、市場実態が主なテーマであった。増殖対象海域の貝殻単価は事業開始年から急激な上昇を始め、今年度も過去最高平均値800～900円/kgとなった。漁獲量は前年比で恩納村157%の上昇、伊平屋村58.6%の下降となったが、3トンと1.4トンといずれも低い水準に推移した。生産額では単価高騰の影響を受けて恩納村では247万円、214%の上昇、伊平屋村でも126万円、75.9%の下降に留まった。身は経年毎にみて、ここ3年間ではほぼ1000円づつ平均単価が上昇し、1990年は5200円となった。

・資源添加技術開発

増殖対象海域（恩納村・伊平屋村）に平均殻径6.8～26.5mmを10万4千4百個放流した。恩納村（5月分）は放流後50日目は発見率2～5%以下となった。放流後80日は2%を下回った。伊平屋村（5月分）は放流後76日では全体的にみて6～23%間と見積られた。しかし、例外として、中3区が突出した高い生残率（75%）を示し、48日後の結果も最も高く、調査時の感触からも明かに貝が多い。中3は唯一他の放流区と底質の点で異なっていることが唯一の相違点であったが、内容が前年例と明かに矛盾しており、恐らくタカセガイの生残率を左右する要因説明は底質や地盤高だけで解決できる問題ではなく、今後、より詳細な分析をおこなう必要があると考えられる。恩納村（11月分）はシェルターと放流サイズの検討を行った。シェルターの無い16mm種苗は放流直後に夥しい死殻が認められ、放流後25日には死殻は殆ど見いだされておらず、生残は0であった。一方、シェルターの無い26mm、シェルターを設けたものは直後の死殻が少なく、特に26mmのシェルター有りは直後は全く死殻がなく、25日目で死殻が多く見られた。生残率は16%と最も高く、放流直後から徐々に食害されていく様子が伺われた。今後、何等かのシェルター検討していくことが必要と考えられた。

参考文献

- ・久保,1989 昭和63年度地域特産種増殖技術開発事業亜熱帯磯根グループ報告（タカセガイ：資源添加技術開発）,34-51pp.
- ・久保,1990 平成元年度地域特産種増殖技術開発事業亜熱帯磯根グループ報告（タカセガイ：資源添加技術開発）,24-31pp.
- ・久保,1989 タカセガイ（サラサバテイ）の放流調査（食害による歩留まりの減少）, 南西海区ブロック介類情報, 南西海区ブロック会議介類研究会, 33-36pp.